

「矛盾の手」

ゲスト：中空 萌（筑波大学人文社会系教授）

中空 吉澤さんの作品は手が描かれているんですけど、見るたびに引きつけられる、ほだされる手があるんですね。最近、私は親しい人を亡くしたんですが、前に観たときは美しいものが見えていたのが、刹那を読み取るような見方になって。形あるものは掴んだ瞬間にこぼれてしまうけど、こぼれたまま残っていく、形を変えて生み出されていくものもあるという、悲しさと希望の両方を感じます。日本画の素材の扱いは難しく、それが魅力と聞いたんですが、どんな感じで難しいんですか。

吉澤 日本画は季節によって湿度が変わると素材の扱い方が変わるんですね。たとえば糊剤として膠を使うんですが、動物の骨や皮から煮出したゼラチンみたいなものなので、それが効いていないと定着しづらくて、手で触るとサラサラ取れてしまったりして、扱いづらいけど、そこがかわいい。

中空 自分がコントロールしきれないので、向こうの都合に合わせてこちらがチューニングしなきゃいけない。西洋的な油絵の世界とはまた違うんでしょうか。

吉澤 油絵は足していけるので、画面の中で絵具を混ぜて作っていく面もあって。私は女子美術大学短期大学で2年間ほぼ油絵をやって、3年次編入で多摩美術大学に行って日本画をしたんですけど、まったく違う感じですね。

中空 油絵の方がコントロールできるものや自分で足したりできるものが多くて、日本画の世界は素材に自分を合わせていく。

吉澤 油絵は画面で作っていくんですけど、日本画は絵を描くまでに紙を貼ったり、墨で線を引きたり、素材と話をしながら、工程がすごく多い。絵具を混ぜて作るころから始めていくので、かなり時間がかかることがあります。

中空 付き合う時間が長いから愛着がわく。人類学の世界観や調査の仕方と近い。人類学も現地に行ってみないと誰に何を聞けるかわからない。私はアーユルヴェーダを研究しているんですけど、大学院生の時にインドに行って、電車で隣に座ったおじさんに話を聞いたら、アーユルヴェーダのプロジェクトに関わっているよ、みたいな感じで、そこから道が開けていった。事前に計画してもうまくいかないところがあって、メタファーとしては、現地の人たちとダンスをする感じ。向こうの仕草に合わせていって、調査の形ができていく。

吉澤 2年も同じ場所に住んで調査をされるのはすごい。

中空 自分の体も変わっていった、見え方が変わっていった、見つかるものがすごくいっぱいあるんですけど、吉澤さんも素材と向き合いながら自分の感覚も変わっていったり、新しい世界が見えたりするのかなと思って。新作はタイルですね。

吉澤 そうなんです。

中空 細かく見ると本当に全然違うパーツでできていて。どういうふうに作られたか伺ってもいいですか。

吉澤 ネットに貼られた白い正方形のタイルを取り寄せて、ネットを全部お湯で取って、タイルをパネルの上に並べて。私は1年間ニューヨークとメキシコに行っていたんですけど、そこで出会った人たちや日本にいる大事な人たちの手をラッカー塗料で描いて、バラして組み替えていったんです。

中空 事前にこうしようと思ったわけではなくて、まず11枚の手を作って、それをバラして。何でバラされたんですか。

吉澤 ニューヨークから帰ってきて、自分の気持ちが帰ってこなかったんですよ。人との出会いが大きかったんで、その人たちのことを思い出に变えるために作業的なことをしたくて。白いタイルを並べ続けるとか、その人たちの手をそのまま描くとか、作業を経て作品化していった。人が一人で構成されているわけではないと感じたし、ニューヨークでもメキシコでも、出会った人に私と同じような共通点があって、人は人だなと思

ったときに、外人は気を使えないとか、何人はこういう人たちだとか、自分に固定概念があったんだなと気づいた。

中空 固定観念というと、その人のアイデンティティを固定化するような型のはめ方があるんだけど、例えばここに描かれた手も、それぞれ独立した個性じゃなくて、誰かの母だったり、自然環境と繋がっていたり。関係性の束の中で、実は繋がっているところがあるんですよ。

吉澤 描いているときは、個人を表してその交じり合いを表現しようと思っていたんですけど、組み替えているときに、タイルが床に散らばるんですよ。個人というのはいろんな影響でできあがっている。食べるものや血の繋がりが、人だけじゃなくて、ものだったり、動物たちだったり、いろんな関係の中で個人ができあがっている。その個人もそうですけど、まわりに対して感謝をすごく感じたというか、この人を構成してくれてありがとうという気持ちになったんですよ。それは作っているときに気づいたことでしたね。

中空 文化人類学で「分人」という考え方があるんです。インディビジュアルじゃなくてディビジュアル。個人は分けられない独立した主体のように思っているけど、そう考える国は少なく、実はインドでも他の非西洋社会でも、関係性の束として人間があると考えます。例えば人間関係も、それぞれの人との関係によって、違った自分が見えてくる。食べるものや生きている土を吸収しながら関係性の中で人ができているという考え方をするんですけど、その世界観とすごく合うと思いました。

吉澤 「矛盾の手」という言葉がずっと私の頭にあって、それを思いながら作品を作ることが多いです。

中空 吉澤さんのキーワードの「矛盾の手、本能の足」は、どういうところから生まれたんですか。

吉澤 タイルの作品を最初に作ったのは2022年で、ちょうどロシアとウクライアの戦争が始まった年で。人間の手は本当にいろんなことができてしまうと思ったんです。愛でることも育むこともできるし、暴力を振るったり、今はボタン一つで何でもできてしまう。そう考えたときに「矛盾の手」という言葉が浮かんで。「本能の足」というのは、足は自分にとってシンプルで、とにかく本能で動きまわるみたいな感じ。

中空 私は「矛盾の手」と聞いたときに、アーユルヴェーダを思い出しました。アーユルヴェーダはインドの伝統医療なんですけど、西洋医学と全然違う考え方をするんです。私たちの体と心はつながっていて、ヴァータとピッタとカパという生命エネルギーの流れでできていて、それぞれの人が異なるバランスを持っているので、病気になったときは本来の自分のバランスが乱れていると考える。西洋医学のように、臓器が異常とか何かを治せばいいということじゃなくて、流れを正さなきゃいけないと考えるんですけど、アーユルヴェーダのお医者さんは手の動きを見るんですよ。関係性の中でものを考えるので、誰かとの関係の乱れとか、自然とか、環境との関係が良くないとか、それこそ矛盾が見えるのかなと思いましたね。

吉澤 中空さんの話を聞いて驚いたんですけど、何万種類という組み合わせで人を見るんですよ。

中空 ある人によると3万7,500種類あるらしいです、私たちのバランスのあり方が。個性というよりは、世界との関係性のあり方がそれぞれ違うみたいなんですよ。 「本能の足」というのもすごくわかる気がして。生態学者の友だちがボルネオでシベットという野生生物の個体を識別するのに、歩き方を見るらしいんです。その子は人間も足を見て識別しているらしいんですけど、本能の強さが現れやすいのが足なのかとか。生態学者が見る足と、アーユルヴェーダのお医者さんが見る関係性の矛盾みたいな手の動きが、吉澤さんの言葉で腑に落ちましたね。

吉澤 ありがとうございます。

中空 吉澤さんは仏教の影響を受けているそうですね。

吉澤 小中高と浄土真宗の学校に通っていて、お経や説法を聞

いているので、仏教が擦り込まれている。特に諸行無常とか、形あるものはみな崩れる、執着するな、という教えを自分の中に感じていて、そこから、形を崩していろんなところに置いていく作品が出てくるのかなと思います。

中空 形あるものは永遠じゃなくて、崩れてしまうけれども、それは悪いことだけでない。流れていくものの中に希望を生み出していくような考え方ですね。

吉澤 その人がくれた言葉とか、その事情が自分にとってあまり良い思い出じゃなかったとしても、形が変わっていくことで、意味が変わっていく。変わってくけど、変わらないものはそこにあるのかなと感じています。自分は辛いと思ったときに海を見に行くことが多くて、特に冬の曇った日の海が好きなんです。海を見ていると手前は荒れているのに、奥を見ると水平線があって落ち着く。自分の気持ちや周りの状況が荒れていても、長い目で見たらスーッと繋がっていくのかなとか、巡り巡って海を見ている違う人に繋がるのかなと捉えていました。

中空 自分の中に閉じず、関係性の中で考えているんですね。ニューヨークやメキシコに行かれたのはどうしてですか。

吉澤 2019年にポーラの若手芸術家の海外渡航支援の助成金を頂いたんですが、コロナで行けなくなって。最初はマイアミに行く予定でしたが、渡航に必要なサインをしてくださったギャラリーが潰れてしまったので、新しく探していたら、ニューヨークでサインしてくれる方が見つかった。それで行ったのはいいですけど、ビルが多くて、空が狭くて、なかなか……

中空 ニューヨークで出会った人の手も描いたそうですね。

吉澤 街は好きじゃなかったですけど、人は本当に温かくて、すごく良い友達ができました。私は学生ビザで行って、語学学校に通いました。多国籍でいろんな方がいて、出会った人たちの手を描かせてもらって、今も連絡を取り合っています。

中空 その後にメキシコに行かれた。

吉澤 メキシコに1ヵ月行って、ニューヨークに戻ってから日本に帰ってきたんです。メキシコはとにかく生きるエネルギーが強い場所でした。ニューヨークも強いんですけど、資本主義やポジティブさへの強迫観念を感じて。メキシコは違った意味で、人が生活をしている感じとか、コミュニティがすごく面白かった。メリダというメキシコで一番治安が良いと言われる町にコーヒーショップがあって、漢字で「生き返る」と書いてあるんですよ。暑いからアイスコーヒーを求めて中に入ったらメキシコ人がいます。彼女はまだ20代なんですけど、すごく日本人や日本文化が好きで。絵描きをやっていると言ったら、あなたがもしここにいてくれたら壁に絵を描いてもらうのに、と言われて、滞在を2泊延ばして壁画を描かせてもらいました。そのときロザリオがかかっている、触ったらいけないかもしれないと思って、外していいかと聞いたら、宗教の話をしてくれて、日本人と私たちの宗教観が似ていると思うけど、どう思う、と聞かれて、すごく心地よかったんです。

中空 文化人類学と似たことをされていますね。事前にコントロールしていたら見えない世界が見えるし、出会えない人と出会えますよね。ニューヨークの資本主義的な欲望とか、多文化主義だけど、一つ一つの文化に踏み込むよりは、それなりに共生できるような収まりを良くした世界とは違った宗教観とか対話が経験できた感じですね。壁画は環境に溶け込んで描くというイメージがあります。描き方や過程に違いはあるんですか。

吉澤 壁画は環境に左右されると感じます。ニューヨークで壁画に馬を描いたんですけど、近隣のイタリア人の方が、2人の娘の部屋からこの馬がよく見えるんだ、すごく嬉しい、と話しかけてくれて。子どもたちも次の日に来てくれて、じゃあこの子たちが見て嬉しい気持ちになるものを描こうと思って、その子たちをモチーフにした天使みたいなのを馬に乗せたり、そういう形で作品が変わっていきました。

中空 普段から素材と対話して一人で描いている感覚ではない

んでしょうけど、よりダイナミックに、吉澤さんだけじゃない視点が入り込んでくる感じなんですよね。

吉澤 めちゃくちゃしゃべりかけてくるので面白かったです。日本で壁画を描くのとはまた違う。通りながら、イエーイみたいな、すっごいね、みたいな感じで言ってくれたり、バスの運転手がバスを止めて、めっちゃいいねって話しかけてきて。

中空 私もそういう感じで論文を書きたい。いろんな人に、いいねって言われながら（笑）。吉澤さんを通して見た世界だけじゃない世界が入り込んで、いろんな人の視点があると、見る人も自分が入り込みやすい余地が生まれると思います。完成された世界というより、綻びもあって、邪魔もあって、視点もあって、より開かれた絵じゃないかな、と思いますね。

吉澤 壁画の完成間近に、乳母車を引いた黒人のお母さんと子どもが喧嘩して歩いてきたんですよ。そうしたら絵を見て止まって、会話が弾んで仲直りみたいな形で、絵を通りすぎる頃には怒鳴り声が止んだことがあって、すごく印象的だったですね。

中空 見るものだけでなく、関係性を修復したり、世界を作り直していくものとしてある。壁画は自然との関係でもあるわけですよね。人間と自然の境界もなくなっていくような。ジュゴンの絵は少し前に描かれた作品ですよね。

吉澤 2012年に大学院を修了した直後は展示に誘っていただくこともなくて、どんどん自分の世界が閉じて、深海にいるような感覚に陥ったんです。ジュゴンは同じ水草ばかり食べるので腸が30mあるんですよ。自分も食わず嫌いというか、知識を一方向からしか入れなかったり、同じような人としか付き合わなかったり、こんな感じなのかなという気持ちになって、シンパシーを感じてしまったというか。踏み出す足が欲しくて、一歩前にいきたい気持ちで描いたんですよ。

中空 ジュゴンと人間の足が合体しているのも面白いですね。草をゆっくり取り入れながら生きているというのは、人間のあり方も、この世界と、自然や動物と繋がっていると読めるのかなと。無理やりな解釈かもしれないですけど。

吉澤 木の根とか腸とか血管とか筋肉とか水草とかイソギンチャクとか、いろんなものを連想しながら、自然のエネルギーを吸収して自分の栄養に変えたかったんです。でも消化不良を起こす感じだったんですけど。

中空 今の文化人類学は、自然や動物との繋がりの中で人間が生きていることを考えるんですけど、よく例に出されるのがダンゴイカで、細菌を体内に取り入れることによって光を発するんです。私たちも他の植物や動物を取り込むことによって、初めて人類は人間らしくなる。ジュゴンも草を取り込んでゆっくり消化して、世界との繋がりの中で生きているのかもしれないね。今は「自然の権利」訴訟と言って、普通、裁判は人間しか起こせないんですけど、自然も同じ権利を持つと仮定して訴訟を起こすことがあって、インドでもガンジス川に人間と同じ権利を認めようという動きがあったんです。日本でも辺野古の基地建設に反対して、ジュゴンを原告として起こした訴訟があります。私は今、奄美大島に通っているんですが、奄美でもアマミノクロウサギを原告としてゴルフ場建設に反対した訴訟がありました。自然と人間の繋がりや、信仰のあり方などの関係の中で環境破壊を考えていかなきゃいけないという訴訟だったので、今日伺ってきた話と通じますね。

吉澤 とても面白いです。私も奄美大島に絶対行きます。

中空 お待ちしていますね。また奄美でも人類学的な旅をされそうですね。本当に人類学の調査はコントロールできないので、向こうの人について何時間も暗い森を歩きまわるとですけど、きっと吉澤さんも奄美に来られたら、いろんな偶然の出会いの中で、また新しい絵画とかアート、あるいはそれをもっと超えるような世界との繋がりも生み出されるんじゃないかなと期待しています。

（まとめ：岡村幸宣）